

チャーサーの「憐れみに寄す嘆きの唄」(試訳)

柴田竹夫

「憐れみ*」よ 私はあなたをこんなにも長い間
悲嘆に暮れ 絶えざる苦痛に満ちた心で求め続けてきた
この世に生きる者で私ほど悲しみに包まれた者は
二人といなかったでしょう まことに
愛の神の残酷さ 暴虐ぶりを 5
「憐れみ」に訴えようと思った
愛の神は私が誠実であるにも関わらず私を破滅させようとするのだ

長い年月にわたって
訴えかけの時を絶えず求めていた時
涙に濡れながら「憐れみ」のもとに駆け寄り 10
「冷酷」に対する私のあだを討つようにと願い出ようとした
だが私が口をついて言葉を出す前に
身を切るような私の苦痛を告げる前に
「憐れみ」は死に 心の中に葬むられた*ことを知った

棺台を見ると私は倒れ 15
気を失っている間 ぴくりとも動かなかった
だが青ざめた顔色をして立ち上がり
哀れみ深いまなざしを彼女に投げかけ
なきがらに急ぎ近寄り
その魂のために祈り始めた 20

私は死んだも同然だった それ以上言葉もなかった

この様に「憐れみ」が死んでからは 私も破滅した

ああ まさかそのような日が来ようとは！

このような時に一体意気を失わない男が 있을까？

悲しみに満ちた心は一体誰に向かって叫び声を上げればよいのか？ 25

今や「冷酷」が我々をことごとく殺そうと企む

人は空しい希望を抱き 苦痛をいやす術もない

彼女が死んだ今となっては我々は一体誰に泣き言を言えばよいのか？

だが次のような新しい驚きが私の心の中に広がる

私を除いては誰も彼女の死を知らない 30

彼女の生涯を通じて多くの人々が彼女を知っていたのに

だが彼女の死は突然ではなかった

私は初めて英知 人の心を持って以来

彼女を熱心に追い求めてきた

だが私が彼女を見つけ出せる前に彼女は死んでしまった 35

棺台のまわりには次の者どもが 思った通り陽気に

悲しみをあらわにすることもなく立っていた

見事な装いをした「善良」

そしてみずみずしい「美」「悦楽」「歓喜」

「自信に満ちた物腰」「若さ」「誠実」 40

「知恵」「高位」「畏怖」「自制心」

これらの者どもがきずなと連合によって結託していた

嘆願書として「憐れみ」に差し出すために書いた

嘆きの唄を私は手にしていた

だが私を助けてくれるどころか私の嘆願を台無しにしようとする 45
これらの者どもがそこに居るのに気づき
嘆きの唄を差し出すのを差し控えた
確かにこれらの者どもに対しては
「憐れみ」がいなければいかなる嘆願書も役に立たないからだ

それから先程触れたこれらなきがらを見守る美德どもを 50
「憐れみ」の他は全て後に残した
これらの者どもは「冷酷」のきずなによって結託し
私を殺すことに全員同意したのだった
そして私は嘆願書を再びしまいこんだ
敵にそれを見せる気はなかったのだ 55
その内容は言葉少なに次のようなものであった

嘆 願 書

最も謙虚な心 最高の畏敬
優美な花 あらゆる美德の花冠よ
あなたの僕が^{しもべ} もしあえてそのように私を呼ばせてもらえるならば
私が受けた耐え難い苦悩を 60
あなたさまに以下のように訴えます
私の苦境のためばかりでなく
あなたの名声のためにも

私は次の様な状況に置かれています
あなたの敵である「冷酷」が あなたの權威にはむかい 65
「善良」「高貴」「礼節」と結託しています
その暴虐ぶりを人々に気付かれないように

女らしい美しさを装っています

「優しさに伴う美」と呼ばれるあなたの座所を
今やあなたから奪い取ってしまった

70

生来 あなたの正当な継承により

あなたは「善良」と結び付く

あなたは逆境にある「真実」を助けるべく

まさしく力を尽くすべきです

あなたは「美」の花冠でもあります

75

もしあなたがこの「美」と「善良」の両者を欠くならば
確かにこの世は失なわれてしまう これ以上言葉もない

やさしい方よ あなたなしには

「礼節」も「高貴」も何の役に立ちましょう？

あなたを支配するのは「冷酷」なのですか？

80

ああ 一体どのような心がそれに長く耐えられるのでしょうか

それゆえにあなたがあの危険な連合を打ち破るよう

すみやかに注意を払わなければ

あなたはあなたに忠実な人々を破滅させるでしょう

さらにもしもあなたがこのようなことをお認めになるならば

85

その時 たちまちあなたの名声に傷が付き

「憐れみ」とはどのような方であったのか

誰一人知る者はいなくなることでしょう

ああ あなたの名声がかくも地に墮ちるとは！

今やあなたの座所を占める「冷酷」によって御自身の継承からは締め出され

あなたのやさしさを求める私たちは絶望してしまった

復讐の三女神*の女王よ 私を哀れんで下さい
あなたをこれほど長い間しみじみと捜し求めてまいりました
時が立つにつれてますますあなたを愛し畏怖する
この私にあなた的一条の光を投げかけて下さい 95
というのも確かに私は痛手を被りました
器用に嘆願することなどできない私ですが
お願いです 私の苦痛を哀れんで下さい

私の苦痛とは次のようなものです 望みのものは
手に入れられず それに近いものも得られない 100
しかも「欲望」が私の心を燃やし続ける
その一方で 私がどこへ行こうとも
私の身近にあつて 私の苦痛を増すものはいかなるものであれ
どこにいようとも 捜し求めはしなかった
私に欠けているものといえばただ自分の死と棺台だけ 105

心が描くあらゆる悲痛を味わっていて
しかも それをあなたにあえて嘆こうとは思わない だから
私の苦痛をいくらかでも訴える必要があるのでしょうか？
私にはよくわかっております たとえ私が目覚めていようと眠っていようと
浮こうが沈もうが あなたは気にかけないことを 110
だがそれでもやはり死ぬまで私はあなたに忠実であり続けます
そしてこのことはよくおわかりになられることでしょう

要するに私はいつまでもあなたの僕なのです
あなたがあなたの敵である「冷酷」に私を殺させようとも
私の魂はどのように苦しみ嘆こうとも どのようなことがあつても 115
あなたにお仕えすることは決して止めたりはいたしません

あなたは亡くなってしまった ああ まさしくそうなのだ
だから私がこのように悲嘆に暮れ 苦痛に満ちた心で
あなたの死に対し 涙を流し 嘆き悲しむのももっともなことなのです

<作品：“The Complaint unto Pity”>

<テキスト：F. N. Robinson (ed.), *The Works of
Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (Oxford: Oxford
Univ. Press, 1957)>

注

- 1行 「憐れみ」(‘Pite’)を含め、l. 11の「冷酷」(‘Cruelte’), ll. 38—41の抽象名詞も私の恋する婦人の様々な属性の擬人化である。
- 14行 恋する人のつれないこと。
- 92行 the Furies (Erynyes)のこと。Pity自身はthe Furiesの一人ではないが、Pityだけが彼らを支配できる。

“Complaint”という言葉は、通常つれない恋人に宛てた悲嘆の調子を持つ愛の詩を表わす。この詩の韻律は *rime royal* (七行連で *ababbcc* と韻を踏む) で、この詩は英語で書かれたこの詩形の最も初期の例である。チョーサーは後に *Troilus and Criseyde* においてこの詩形を使う。この詩の製作年代は不詳であるが、初期の作と考えられている。原典は不明だが、W. W. Skeatはそれがあるフランス詩であったとしても驚くにあたらないと言う。チョーサーはおそらく洗練された言葉使いのフランスの宮廷詩をイギリスに移植しようと、なんらかのフランス詩を翻訳したのであろう。それはこの詩の堅苦しいところや形式的なところからも言えることであろう。この詩のうたい手は擬人化された「憐れみ」(Pity)に彼の恋の嘆きを訴えているわけであるが、擬人法(*personification*)は中世の詩人の間では広く用いられていた技巧の一つであるから、特定の原典を探す必要はないのかもしれない。愛のアレゴリーの擬人法は *the Roman de la Rose* によって広まったものであった。ただしチョーサーは擬人法の技巧を使うことは意外と少ないけれども。この詩は今ではチョーサーの個人的な報われない愛の経験に基づくものというよりはコンベンショナルなものと考えられている。